註

序章

1　柳田国男「わが国郷土研究の沿革」『柳田国男全集八』所収、二三七－二四八頁。
2　大藤時彦『日本民俗学史話』三一書房、一九九〇年所収、八五－一一八頁。
3　『朝日新聞』一九四一年一月十日付朝刊、四面。
4　国民学術協会は中央公論社社長嶋中雄作の発意で一九三九年に発会、一九四〇年に設立者の寄付金をもとに財団法人として設立した民間機構である。桑木厳翼、三木清、清沢洌、長谷川如是閑などが中心人物で、柳田は最初からの会員であり、一九四二年から理事となった（柳田国男研究会編『柳田国男伝』三一書房、一九八八年、九一三頁）。
5　大藤時彦『日本民俗学史話』前掲に収録されている（一一九－一六八頁）。
6　関敬吾「日本民俗学の歴史」『日本民俗学大系二』平凡社、一九五八年所収、八一－一九六頁。
7　同前、一三二頁。
8　ここで「柳田ブーム」とは柳田を主題とする各種記念イベント、座談会やシンポジウムの開催、雑誌の特集号や関連著作の出版が社会、思想状況によって一時期大量に現れる現象をさす。一九七〇年代より始め、一九九〇年代まで約十年ごとに現れてくる。
9　福田アジオ『日本民俗学方法序説―柳田国男と民俗学―』弘文堂、一九八四年、三頁。

10 益田勝実「『炭焼日記』存疑」『民話』一九五九～一九六〇年。
11 橋川文三「柳田国男」『二〇世紀を動かした人々一　世界の知識人』講談社、一九六四年。
12 たとえば、中村哲『柳田国男の思想』法政大学出版局、一九六七年、宮田登『原初的思考―白のフォークロア』大和書房、一九七四年など。
13 柳田国男研究会編『柳田国男伝』前掲、八九六－八九九頁を参照。
14 子安宣邦「一国民俗学の成立」『岩波講座現代の思想一　思想としての二〇世紀』岩波書店、一九九三年所収。
15 たとえば、赤坂憲雄「書評『「大東亜民俗学」の虚実』」『中央公論』一九九六年十月、国分直一「『民俗台湾』の運動はなんであったか―川村湊氏の所見をめぐって」『しにか』大修館書店、一九九七年二月、赤坂「一国民俗学を越えて」『創造の世界』一九九九年秋号（のち、同名の著作に収録、五柳書院、二〇〇二年）、後藤総一郎「柳田国男の『殖民地主義論』の誤謬を質す」（後藤編『常民大学研究紀要二　柳田国男のアジア認識』岩田書院、二〇〇一年）など。
16 佐藤健二・船曳健夫「対談：メーキング・オブ・柳田国男　複数の柳田国男がいる」（『ちくま』三二〇、三二一号、一九九七年）を参照。柳田国男の思想や行動を一義的に決め付けるのではなく、その複雑性を複眼的に理解すべきだという主張は重要である。
17 新谷尚紀「戦争と柳田民俗学」福井勝義・新谷尚紀編『人類にとって戦いとは五　イデオロギーの文化装置』東洋書林、二〇〇二年、一〇七頁。
18 福田アジオ「民俗学にとって何が明晰か」『柳田国男研究五』一九七四年四月、のち「研究課題としての方法論」に改題して福田『日本民俗学方法序説』前掲に収録されている。
19 同前、三頁。
20 鶴見太郎『柳田とその弟子たち―民俗学を学ぶマルクス主義者』人文書院、一九九八年、同『橋浦泰雄伝―柳田学の大いなる伴走者』晶文社、二〇〇〇年など。
21 周作人は中国民俗学草創期の指導者の一人である。日本留学中、柳田国男の初期民俗学著作『石神問答』『遠野物語』を購入し、一九一一年帰国してからも日本民俗学関係の出版物を積極的に購読していた。彼は歌謡収集と民俗学研究の積極的な提唱者であり、初めて中国で「民俗学」という言葉を使い、そして柳田や日本の民俗学を紹介した人物であった

（周作人「苦茶随筆二　遠野物語」（一九三一年一月十七日付）杭州中国民俗学会編『民俗学集鐫』第二輯所収、一九三二年八月、飯倉照平「周作人と柳田国男」『柳田国男全集月報』二五、筑摩書房、二〇〇一年一月、王文宝『中国民俗学史』巴蜀書社、一九九五年などを参照）。

22　江紹原は比較宗教学の出身であるが、迷信や俗信に関心があり、彼の『髪須爪：それらに関する迷信』（開明書店、一九二八年）は中国における迷信研究を開拓した業績として高く評価されている。一九二八年、周作人の紹介で彼はこの著作を南方熊楠に贈呈し、両者の間にしばらく文通があった（小川利康「中国の民俗学者江紹原と熊楠」『文学』八－一、岩波書店、一九九七年一月、王文宝『中国民俗学史』前掲を参照）。

23　何思敬（何畏）は日本留学中、中国の民俗学運動を日本に紹介した第一人であった。一九二七年初に帰国し、国立中山大学法学部に就職したが、同大学の民俗学会の初期活動において重要な役割を果たし、日本民俗学との連絡役も務めていた（『中大週間』創刊号、一九二八年一月、『民俗学』一－三、一九二九年九月、同二－一一、一九三〇年十一月などを参照）。

24　鍾敬文と婁子匡はともに杭州時代から中国民俗学運動の中心人物である。鍾は一九八〇年代中国民俗学が復興してから「中国の柳田国男」と言われるほどの指導者であり、婁は戦後台湾に赴いて一九七〇年代から戦前の中国民俗学関係の出版物を数多く復刻し、「中国民俗学の守護神」と言われている。

25　婁子匡「中国民俗学運動の昨日と今日」『民俗学』五－一（一九三三年一月）、鍾敬文「中国民譚の型式」同五－一一（一九三三年十一月）、他に『民俗学』四－九（一九三二年九月）から五－一二（一九三三年十二月）、『民俗学集鐫』第二輯前掲、『民間月刊』二－三（一九三二年十二月）から二－一〇・一一（一九三四年）を参照。

26　『旅と伝説』一〇－二から一〇－四（一九三七年二～四月）、『民間伝承』二－七（一九三七年三月）の寄贈書目を参照。

27　その前にたとえば一九八三年五月中国民俗学会が創立する大会に伊藤清司、飯倉照平、加藤千代などが出席したなど、個人的な繋がりは持っていた。林一白「中国民俗学会在北京隆重成立」中国民俗学会編『会刊』第二期、一九八四年三月、七五頁。

28　邱淑珍「柳田国男と台湾民俗学」後藤総一郎編『常民大学研究紀要二　柳田国男のアジア認識』岩田書院、二〇〇一年所収。

29 呉密察「『民俗台湾』発刊の時代背景とその性質」藤井省三他編『台湾の「大東亜戦争」—文学・メディア・文化』東京大学出版会、二〇〇二年所収。

30 崔吉城「日帝殖民時代と朝鮮民俗学」中生勝美編『植民地人類学の展望』風響社、二〇〇〇年所収。

31 最近鶴見太郎は柳田国男先生古稀記念会を取り上げている（鶴見「柳田民俗学の東アジア的展開」末広昭編『岩波講座「帝国」日本の学知　第六巻　地域研究としてのアジア』岩波書店、二〇〇六年）。当記念事業については本書の第5章で検討している。

32 中生勝美「植民地主義と日本民族学」中国社会文化学会『中国—社会と文化』八、一九九三年、「植民地の民族学—満洲民族学会の活動」『へるめす』五二、岩波書店、一九九四年、「民族研究所の組織と活動：戦争中の日本民族学」『民族学研究』六二－一、一九九七年、「内陸アジア研究と京都学派—西北研究所の組織と活動」中生編『植民地人類学の展望』前掲。

33 中生勝美「植民地人類学の射程」中生編『植民地人類学の展望』前掲、三八頁。

34 それ以前の著作集の試みとして「創元社選書」十七冊（一九三八～一九五一年）、実業之日本社『柳田国男先生著作集』十二冊（一九四七～一九五三年）があった。『定本』は新装版（一九六八～一九七一年）、愛蔵版（一九八〇～一九八二年）として再販され、さらにその普及版として単行本の口述筆記部分が追加されたちくま文庫版『柳田国男全集』全三二巻（一九八九～一九九一年）も発行された。

35 この資料は、橋浦泰雄のご遺族橋浦赤志氏が提供し、鶴見太郎氏が調査・整理したものである。その全体像について鶴見太郎「『橋浦泰雄関係文書』について」『京都文教大学人間学部研究報告』一、一九九八年。同（続）『京都文教大学人間学部研究報告』二、一九九九年を参照。

36 柳田国男は「帝国」と「日本」を使い分けているようである。「内地」をさす語として、後に「日本」或いは「国内」などが一般的であるが、一九三〇年代前半、「旧日本」（「年中行事調査標目」の緒言『旅と伝説』七－四、一九三四年九月）や、「帝国の旧版図」（『葬制沿革史料』の緒言『宗教研究』新一一－五、一九三四年九月）などの表現も見られる（『柳田国男全集二九』所収、二三八頁）。

第1章

1　渡瀬荘三郎「我国婚礼ニ関スル諸風習ノ研究」『人類学会報告』二、一八八六年三月。

2　各回のテーマは①各地新年の風俗、②各地贈答の風習、③各地若者の娯楽、④各地の育児習俗、⑤各地の食事、⑥各地の年中行事であった。

3　坪井正五郎「土俗調査より生じる三利益」『東京人類学会雑誌』九五号、一八九四年二月、一七三頁。

4　中薗英助『鳥居龍蔵伝：アジアを走破した人類学者』岩波書店、一九九五年。

5　高木敏雄「郷土研究の本領」『郷土研究』創刊号、一九一三年三月、二－四頁。『郷土研究』は柳田国男と高木が協力して発刊したものであったが、一年後高木が退出し、柳田個人の努力で一九一七年三月（四－一二）まで刊行し、休刊を宣言した。

6　「本誌の任務」『民俗』創刊号、一九一三年五月、一頁。『民俗』は石橋臥波が編集したもので、坪井正五郎、医学・文学博士の富士川遊、東洋史の白鳥庫吉など錚々たる大家が名を連ねる日本民俗学会の機関誌であり、五冊しか発行しておらず、学会も活発的な活動を見せなかった。

7　福田アジオ『柳田国男の民俗学』吉川弘文館、一九九二年、二頁。

8　前者については例えば藤井隆至『柳田国男　経世済民の学―経済・倫理・教育』名古屋大学出版会、一九九五年を参照。後者に関して、「健全なナショナリズム」として評価する意見（伊藤幹治『柳田国男と文化ナショナリズム』岩波書店、二〇〇二年）と、近代日本の国民国家の成立と共犯関係を有するものとして批判する意見（子安宣邦『近代知のアルケオロジー　国家と戦争と知識人』岩波書店、一九九六年）が分かれているが、柳田が、国民国家・帝国と複雑に絡み合うナショナリズムの持ち主であることは間違いなかろう。たとえば彼は一九〇五年十月、長兄鼎と次弟静雄と故郷布佐の竹内神社に「旅順陥落之日建」と刻んだ「戦勝記念碑」を建立し、桜五百本を植樹している（柳田国男研究会編「柳田国男年譜」『柳田国男伝　別冊』三一書房、一九八八年、一三頁）。

9　柳田国男『故郷七十年』（『柳田国男全集二一』所収）。

10　柳田国男「Ethnologyとは何か」『青年と学問』所収（『柳田国男全集四』一六〇頁）。

11 同前、一五九頁。
12 柳田国男「郷土研究といふこと」『青年と学問』前掲所収、一三四頁。
13 柳田国男「日本の民俗学」『青年と学問』前掲所収、一七〇頁。
14 柳田国男「青年と学問」『青年と学問』前掲所収、一五－一六頁。
15 同前、二七－二八頁。
16 同前、二七頁。
17 柳田国男「Ethnologyとは何か」前掲、一六〇頁。
18 石田幹之助は始めはモリソン文庫の主任であり、一九二四年にモリソン文庫が財団法人東洋文庫となる際、その初代の主事として任命された。
19 石田幹之助は北京大学の民俗学関連出版物を網羅的に集め、東洋文庫で保管していたことについては何思敬「読妙峰山進香専号」（『民俗』国立中山大学語言歴史研究所、一九二八年四月）を参照。そして一九三三年一月より『民俗学』では四回にわたって、「『民俗学』所蔵　支那の民俗学的雑誌目録　東洋文庫閲覧室に保管」として石田によって整理された中山大学の『民俗週刊』創刊号から第一一〇号まで各号（うち、計六号は欠本）の目次が載せられている。
20 柳田国男「交友録　エリセーフ父子」『神戸新聞』一九五八年（のち『故郷七十年』所収）、岡正雄「年譜」『異人その他』言叢社、一九七九年、石田幹之助「柳田先生追憶」『石田幹之助著作集四』六興出版、一九八六年。
21 何畏「支那の新国学運動」『民族』一－五、一九二六年七月、一三一頁。
22 のち刀江書院より単行本として出版される（『柳田国男全集五』所収、一九一－二三〇頁）。
23 柳田国男の方言論について、赤坂憲雄は詳しい検討を行い、特に方言における東西の差について意図的に言及を避けていることを指摘している（赤坂『一国民俗学を越えて』五柳書院、二〇〇二年を参照）。
24 一九二八年三月史学大会での講演「婚姻制の考察」を改稿したものである。初出は「史学対民俗学の一課題」という副題が付けられていた（『柳田国男全集十』所収、六二五－六六八頁）。
25 福田アジオは地域差を時代差に転換する比較研究法に見られた進化主義の影響を批判し、配列の根拠、多系統の可能性、変遷の理由、他の民俗事象との関連、変遷の性質などの点から、それが民俗研究に応用される際の問題点を指摘して

いる（福田『日本民俗学方法序説』前掲を参照）。

26 R・モース「柳田民俗学のイギリス起源」『展望』二一〇、一九七六年を参照。

27 柳田国男「地方学の新方法」『青年と学問』前掲、一〇九頁。

28 初出『旅と伝説』一－八、三元社（『柳田国男全集十三』所収、二一九－二二〇頁）。

29 初出『人類学雑誌』四五－五（『柳田国男全集二八』所収、二七五頁）。

30 柳田国男『民間伝承論』（『柳田国男全集八』所収、一四頁）。

31 岡正雄訳『民俗学概論』岡書院、一九二七年、今泉忠義訳『民俗学の話』大岡山書店、一九三〇年、後藤興善訳『民俗学入門』郷土研究社、一九三二年など。

32 折口信夫「民俗学」『日本文学大辞典』新潮社、一九三四年。

33 柳田国男「郷土研究の方法」『青年カード』一九三四年十一月（『柳田国男全集二九』所収、二四一頁）。

34 柳田国男「郷土研究と民俗学」『肥前史談』一九三六年六月～十月（『柳田国男全集二九』所収、三八四頁）。

35 柳田国男『民間伝承論』前掲、八一頁。

36 同前、一〇三－一〇四頁。

37 同前、八一頁。

38 たとえば、柳田国男は「郷土研究の方法」（『青年カード』第三次第二部第八号、大日本聯合青年団、一九三四年十一月）では、「しかも、此の国土の中に一つの種族が行き亘つてゐることは、国として非凡であるといはざるを得ない」と述べている（『柳田国男全集二九』所収、二四〇頁）。

39 柳田国男『民間伝承論』前掲、四七頁。

40 同前、三七頁。

41 同前、三四頁。

42 柳田国男「食物と心臓」初出『信濃教育』（『食物と心臓』所収『柳田国男全集一〇』三六七頁）。

43 柳田国男『民間伝承論』前掲、六三頁。

44 同前、七二－七三頁。

45 同前、九七頁。
46 「柳田国男年譜」前掲、四〇－四一頁。
47 大藤時彦『日本民俗学史話』前掲、四五頁。
48 「柳田国男年譜」前掲、四二－四三頁。なお、他は民間伝承の会が創立されると同時に入会したのに対して坂口一雄はだいぶ遅れて『民間伝承』二－一〇（一九三七年六月）で初めて入会した。
49 「柳田国男年譜」前掲、四三頁。
50 「民間伝承採集事業説明書」『民俗学』三－八、一九三一年八月、四二八－四三〇頁。
51 具体的に柳田国男は五年各二ヶ月、折口信夫は五年各三ヶ月、佐々木喜善は五年各十ヶ月であった（同前参照）。なお、期待されていた佐々木は一九三三年に亡くなった。
52 柳田国男「採集事業の一画期」大間知篤三編『山村生活調査第一回報告書』一九三五年。
53 柳田国男「今日の郷土研究」『柳田国男全集二九』所収、一七九頁。
54 同前、一八三頁。
55 柳田国男『民間伝承論』前掲、四五頁。
56 「趣意書」比嘉春潮編『郷土生活研究採集手帖』郷土生活研究所、一九三四年。
57 このほか、山形、群馬、長野、岐阜、和歌山、愛媛、鹿児島などの地方研究家により、『採集手帖』に基づいた調査も行われており、『山村生活の研究』（民間伝承の会、一九三七年）では十四村をあげている。
58 たとえば、社会学的な観点から日本の村落調査を始めた鈴木栄太郎（一八九四～一九六六年）は、その主著である『日本農村社会学原理』（時潮社、一九四〇年）において、有名な「自然村」概念を提出し、「村の精神」を唱えているが、その基本データは『山村生活の研究』（前掲）によるところが大きい。福田アジオ「村落生活の伝統」『日本民俗学講座二 社会伝承』朝倉書店、一九七六年を参照。
59 柳田国男「民俗学の三十年」初出『民間伝承』六－六、一九四一年三月（『月曜通信』所収『柳田国男全集二〇』一二八頁）。これは「日本民俗学の建設と普及の功により」第十二回朝日文化賞（一九四〇年度）を受賞した柳田の受賞記念講演会での挨拶である。

60 鶴見太郎『橋浦泰雄伝』前掲、一三九－一四〇頁。
61 「日本民俗学講習会記事」『民間伝承』創刊号、一九三五年九月。
62 柳田国男編『日本民俗学研究』岩波書店、一九三五年。
63 柳田国男「小さい問題の登録」『民間伝承』創刊号、一九三五年九月。
64 橋浦泰雄「インタビュー・柳田国男との出会い」『季刊柳田国男研究二』一九七三年。
65 柳田国男「郷土研究と民俗学」（一九三六年四月二〇日佐賀民俗講演会での講演、『柳田国男全集二九』所収）三八二－四〇五頁。なお、注意すべきなのは、「さうして疑惑が起つたとしても北海道や朝鮮に旅して集めねばならん事では無し、ちつともおくくふな事は無い」（四〇四頁）とあるように、研究対象には朝鮮のような植民地は勿論、北海道も含まれていなかった。
66 柳田国男「月曜通信――『旅と伝説』について」初出『民間伝承』一〇－三、一九四四年三月（『木思石語』所収、『柳田国男全集十三』三五一頁）。
67 小野博史「旅と伝説」福田アジオ他編『日本民俗大辞典』（下）吉川弘文館、二〇〇〇年、六〇頁。
68 萩原正徳は奄美大島名瀬村に生まれ、本業は写真製版であった。関敬吾は一九三〇年、彼の勧めと紹介で柳田宅を訪れることをきっかけに民俗学研究に転向したと回想している（関敬吾「萩原正徳さん」『日本民俗学大系八』平凡社、一九五九年、四二三頁）。
69 松本信広「日本民俗学界鳥瞰」松村瞭編集代表『日本民族』岩波書店、一九三五年十一月、二一四頁。
70 写真などへの重視は、投稿するにあたって写真や絵葉書を添付してほしいと初期において雑誌の編輯後記などで再三注意を促していたことと、毎号大量の写真や絵図を載せていることからわかる。
71 柳田国男「木思石語」（五回連載、一－八～一一、二－三）、「再び白米城の伝説に就きて」二－一〇、「伝説と習俗」（三－一、二）など。のち『木思石語』（一九四二年）としてまとめられる。
72 「昔話新釈」（三－四）以下、「瓜子姫説話」（三－五）「田螺婿入譚」（三－六）「隣の寝太郎説話」（三－七）「絵姿女房説話」（三－九）「昔話採集者の為に」（四－四）「和泉式部の足袋」（四－一一）「昔話の分類について」（七－一二）「初夢と昔話」（一〇－二）など。この中の多くはのち『桃太郎の誕生』（一九三三年）としてまとめられる。

73 十三回連載、『旅と伝説』六－三～六、八～一一、七－一～四。ちなみに、柳田国男の指導下で調査項目は多く作られたが、この「年中行事調査標目」はその先駆けであった。「山村調査項目」（『民間伝承』創刊号）以降、調査項目はすべて『民間伝承』で発表されていた。

74 郷土玩具の特集は創刊から一九三〇年代半ばにかけてほぼ年に一回のペースで計七回組まれており（『旅と伝説』一－六、二－四、三－三、四－五、五－一一、六－一二、八－八）、その中心的な人物は有坂与太郎であった。

75 「編輯後記」『旅と伝説』一－八（一九二八年八月）。

76 一九四四年十二月の『民間伝承の会会員名簿』では二二一八名の会員の氏名と住所が掲載されている（成城大学民俗学研究所蔵「橋浦泰雄関係文書」所収。以下「橋浦文書」と記す）。

77 大笹吉次郎「切符の話」『旅と伝説』一－二（一九二八年二月）七七頁。

78 「会員名簿」『旅と伝説』三－一〇、一九三〇年十月。

79 一九三三年一月、日本軍は山海関を占領し、二月に熱河省を侵攻し始めた。それを受けた国際連盟は①満洲の主権は中国に属する、②現在の「満洲国」を承認しない、満洲は国際管理のもとにおくと勧告した。三月、「満洲国」不承認案に対して賛成四二・反対一（日本）・棄権一（シャム）という総会決議の結果を不服し、日本は国際連盟を脱退した。

80 「いよいよ日支事変も大きくなつて来ました。大和民族が踏むべき当然の茨の道とあつてみれば全力を上げて突破するより外はないでせう。我々や我々の子孫を第二のエジプトや印度の境遇に墜すか墜さぬかは一つに今回の事変の結果に懸つてゐる様に思はれます。当面の敵は支那にせよその背後に〇国のある事は最早常識となつてゐます（中略）軍事行動に就いては門外漢であつて見れば、我々はそれぞれの専門の方々の力に信頼して、銃後の固めを強めつつ吾々のめざす目的に向かつて邁進する事が又国家に対する責任でなければなりません」とある（「後記」『旅と伝説』一〇－九、一九三七年九月）。

81 『旅と伝説』一二－一一（一九三九年十一月）七四頁、同一六－一〇（一九四三年十月）二七頁。

82 藤原相之助については佐野賢治「東北民俗学からアジア民俗学へ―藤原相之助論（一）」『比較民俗学研究十七』二〇〇〇年三月、一一〇－一二三頁を参照。

83 藤原相之助「絵姿女房につき」『旅と伝説』三－一一、一九三〇年十一月、一八頁。

84 『旅と伝説』四－九、一九三一年九月、一二－一三頁。
85 同前、二〇頁。
86 藤原相之助「東方の卵生神話と南方海洋民族の伝説（一）」、同（二）『旅と伝説』一九四二年九月、十月、「大東亜民族と高天原文化」同一九四三年四月、五月、七月。
87 「新入会員」『民間伝承』一－二、一九三五年十月。
88 桑江常夫「満洲習俗娘々祭」『旅と伝説』九－九、一九三六年九月、五四頁。
89 桑江常夫「満洲と琉球の習俗（一）」『旅と伝説』一〇－一、四一頁。
90 『民間伝承』二－八（四月十日現在）の新入会員紹介では「桑江常八」とあるが、次号で「夫の誤り」と訂正された。
91 倉田一郎「戦時下の民俗学」『民間伝承』四－六、一九三九年三月。
92 川村邦光はこれについて指摘し、切り捨てられたものを改めて民俗学の研究対象とすべきだと説いている（川村「戦争と民俗／民俗学」『日本民俗学』二一五号、日本民俗学会、一九九八年を参照）。
93 初投稿の順で、橋浦泰雄、大間知篤三、有賀喜左衛門、鈴木棠三、最上孝敬、宮本常一、瀬川清子、高橋文太郎、倉田一郎、長岡博男、平山敏治郎、小寺廉吉、杉浦健一、能田多代子、大藤時彦、小林存、栗山一夫、山口寿々栄、大藤ゆき子、野口長義、宮本勢助、高谷重夫、角川源義、山口貞夫、関敬吾、牛尾三千夫、今野円輔、中山太郎、林魁一、山田隆夫、児玉幸多、千葉徳爾、藤間生大、沢田瑞穂、山口麻太郎、直江広治などの名前が見え、しかも数回投稿した者も多い。
94 『柳田国男全集三〇』所収、一七一頁。
95 藤井隆至「柳田国男のアジア認識」（『アジア経済』一六－三、一九七五年）、そして鶴見太郎「付録・創元社版『アジア問題講座』全十二巻の目次と執筆者・所属」（鶴見「柳田民俗学の東アジア的展開」前掲）を参照。
96 本庄比佐子・内山雅生・久保亨編『興亜院と戦時中国調査』岩波書店、二〇〇二年を参照。
97 上海日本商工会議所編『上海要覧　改定増補一九三九』一九三九年八月再版、一八九頁。
98 同前。
99 『陸軍省　陸支密大日記』S一五－一二六－二二一（防衛省防衛研究所蔵）。

100 『支那調査関係機関聯合会会報』一－二、一九四〇年十二月。
101 聯合会は独自の調査を行わなかったが、『支那調査関係機関聯合会会報』を発行し、加盟機関の連絡・調整に努めた。
102 研修所旧蔵記録／茗荷谷記録Ｅ一〇六、同Ｅ一〇八（外務省外交史料館蔵）。
103 東亜研究所は一九三八年九月、近衛文麿を総裁に企画院の外郭団体として設立され、政財界の有力者と新進気鋭の学者が結集した。敗戦に伴って解散し、その土地、建物、図書資料などは一九四六年に創立された政治経済研究所に継承され、人的資源の一部は満鉄など戦前の中国調査経験者と合流して中国研究所を設立した。柘植秀臣『東亜研究所と私―戦中知識人の証言―』勁草書房、一九七九年、原覚天『現代アジア研究成立史論―満鉄調査部・東亜研究所・ＩＰＲの研究―』勁草書房、一九八四年、江副敏生「幻の研究所―東亜研究所について」『中国研究月報』六二〇、一九九九年十月などを参照。
104 慣行調査は報告書「北支農村慣行調査資料」を計一二三冊刊行したが、研究はできないまま一九四四年三月に調査班は解体を迎えた。戦後『中国農村慣行調査』全六巻が岩波書店から刊行され、その他研究者、調査者は個人研究の形で幾つの業績を見せている。内山雅生「中国史研究における実態調査と地域研究」神田信夫先生古稀記念論集『清朝と東アジア』山川出版社、一九九二年、中生勝美「『中国農村慣行調査』の限界と有効性」『アジア経済』二八－六、一九八七年七月、田島俊雄「日本人による戦前・戦後の中国農村調査」『中国研究月報』六〇〇号、一九九八年二月などを参照。
105 永尾龍造は東亜同文書院―満洲の師範学校―満鉄―満洲国官僚を経て一九三五年から本格的な中国民俗研究に取り掛かった。拙文「戦時下の中国民俗研究―永尾龍造の研究と『支那民俗誌』編纂刊行の背景について」（神奈川大学21世紀ＣＯＥプログラム研究推進会議編『年報　人類文化のための非文字資料の体系化四』二〇〇七年三月）参照。
106 実際第一、二、六巻（一九四〇～四二年）を刊行したところで外務省の火事で中断され、事業再興が出来なかった。同前参照。
107 川村邦光「戦争と民俗／民俗学」前掲、三八頁。
108 小国喜弘『民俗学運動と学校教育　民俗の発見とその国民化』東京大学出版会、二〇〇一年、一一四頁。
109 柳田国男「アジアに寄する言葉」『柳田国男全集三〇』所収、一七五頁。
110 初出は『アジア経済』一六－三。『柳田国男経世済民の学―経済・倫理・教育』前掲に加筆再録されている。

111 たとえば鶴見太郎「柳田民俗学の東アジア的展開」前掲、一一三－一一四頁。
112 柳田国男「続かちかち山」『昔話覚書』所収、以下引用は『柳田国男全集十三』五八五－五八六頁。
113 柳田国男「学問と民族結合」『柳田国男全集三〇』所収、三二九頁。
114 柳田国男「比較民俗学の問題」『定本柳田国男集三〇』所収、七二頁。
115 柳田国男「猿と蟹」『昔話覚書』所収（『柳田国男全集十三』五七〇頁）。
116 『民間月刊』二－五、二－六のエーベルハルト「伯林通信」、二－七の鍾敬文「エーベルハルト博士と中国神話を語る」、二－八のエーベルハルト「『中国新年風俗志』を読む」、二－九のエーベルハルト「伯林だより」、二－一〇・一一合併号の「学界消息」などを参照。『民間月刊』は二－一（一九三二年十月）から中国民俗学会の名義となり、学会の中心雑誌である。二－一〇・一一合併号（一九三四年四月）で停刊となった。
117 高木昌史編『柳田国男とヨーロッパ　口承文芸の東西』三交社、二〇〇六年三月を参照。
118 関敬吾本人の回想による（「中訳本序」王汝瀾・龔益善訳『民俗学』中国民間文学出版社、一九八四年）。
119 小沢俊夫「関敬吾」野村純一・三浦祐之・宮田登・吉川祐子編『柳田国男事典』勉誠出版、一九九八年、七六四－七六六頁。
120 同書はヨーロッパ中心のアアルネ・トンプソン（ＡＴ）分類と異なる、中国の昔話に即した独自の分類として今日においても中国昔話研究の基本文献として高い価値を有しているだけではなく、民族国家に即する分類の必要性と可能性を示した研究としてのちに日本、韓国での同種の分類を刺激したといえよう。
121 たとえば、一九三五年三月、柳田国男は「フィンランドの学問」という講演では、「どうして斯ういふ特色の多い昔話が、世界の全面を蔽ふまでに分布して居るのか。学んだか借りたか誰が運んだか、是を説明し得るてがゝりもまだ見つからず、しかもこの一致を以て種族の親近を推断しようとすると、忽ちに世界は皆同胞となつてしまふので、是には却つて他の証拠が附いて行けないのである」（『柳田国男全集二九』所収、二八四頁）と述べている。一九三七年六月十四日夕方に放送された「鳥言葉の昔話」においても、「この驚くべき昔話の世界的一致は、まだ片端だけしか原因が明かになつて居らぬ」と述べている（「放送二題」として『昔話と文学』一九三八年に収録。『柳田国男全集九』所収、四〇四頁）。

第2章

1　第1章の表8を参照。
2　川島右次・藤本槌重編『網干町史』網干町史刊行会（非売品）一九五一年、七六五－七六六頁。
3　『日本民俗学大系六』所収、平凡社、一九五八年、三九二－三九三頁。
4　太田陸郎の経歴については、前述した先行研究以外、「著者略歴」（太田陸郎『支那習俗』一九四三年、三国書房）、柳田国男「太田陸郎君のこと」（『故郷七十年』所収『柳田国男全集二二』）も参照した。
5　一九一二年四月専門学校令によって設立、当時神学部、英文科と政治経済部がある。
6　一九二〇年大学令によって同志社大学は大学に昇格、文学部に神学と英文、法学部に政治と経済などの学科がある。経済学科が学部として独立したのは一九四八年以降。
7　株式会社富島組編『株式会社富島組五十年史』一九三八年による。
8　一九〇三年から陸軍が姫路に第十師団を設置し、福知山工兵隊はその下の歩兵第二〇旅団第二〇連隊第十工兵大隊のことである（外山操・森松俊夫編著『帝国陸軍編制総覧』芙蓉書房、一九八七年）。
9　前述参考文献以外、神戸市立中央図書館（十四件）、兵庫県立図書館（九件）、国会図書館（八件）、姫路市立図書館（二件）などのデータベース、『考古学』、『旅と伝説』、『兵庫県民俗資料』、『民間伝承』、『近畿民俗』などの雑誌及び西谷勝也「兵庫県」（『日本民俗学大系十一　地方別調査研究』平凡社、一九五八年）などを参照した。
10　その中で太田陸郎が関係したと思われるのは、「智識階級雇用状況並卒業生就職状況調査」（社会課、一九二七年一月）、「酒造関係稼人調査」（社会課、一九二九年一月）、「奥丹後震災救援誌」（社会課内財団法人兵庫県救済協会、一九二九年六月三〇日）、「昭和一〇年現在神戸市不良住宅地区改良事業ニ関スル経過概要（抜粋）」「特殊労働事情調査」（職業課、一九三八年三月）などである。
11　柳田国男「帰らざる同志」『山宮考』所収（『柳田国男全集十六』）。
12　『兵庫県民俗資料』第一輯、一九三二年五月。尚、柳田は一九三三年四月二五日、大阪朝日新聞社神戸支局会議室における兵庫県民俗研究会座談会に出席した（「柳田国男年譜」前掲、四二頁）。

13 「再刊にあたって」『兵庫県民俗資料』国書刊行会、一九八二年
14 『神戸新聞』一九三三年四月。
15 「二七会の記」『姫路中学校校友会会報』第九九号、一九三五年十二月。
16 太田陸郎「兵庫節遺存の確認によるその再検討」『兵庫県民俗資料一八』所収、一九三五年十月。
17 太田陸郎「但馬の親方子方制度」『近畿民俗』一－四、一九三六年八月。
18 一九三二年八月「但馬の親方子方」（『兵庫県民俗資料四』）を発表し、一九三六年年二月、「太田は目下調査中である但馬の親方、子方に関する一部蒐集資料を予報として発表」している（「兵庫県民俗研究会二月例会」『民間伝承』一－六）。
19 太田幸子「けんぽ梨」（柳田国男追悼文）加茂幸男「太田資料」所収（『太田陸郎伝』私家版、一七一頁）。
20 第四号（十二月）に河本正義、第五号（一九三六年一月）に鷲尾三郎、福橋茂樹が入会している。
21 柳田国男『郷土生活の研究法』（『柳田国男全集八』二〇二頁）。
22 柳田国男「郷土研究と郷土教育」一九三二年十一月講演、『国史と民俗学』所収（『柳田国男全集十四』一四五頁）。
23 宮本常一「太田陸郎氏を悼む」（一九四二年十一月二一日付）『旅と伝説』一六－二、一九四三年二月。
24 柴田実は一九二七年に京大の西田直二郎の講義を受ける国史や東洋史の学生によって民俗談話会が始まり、後京大民俗学会と改め、会誌『民俗叢誌』の発行を計画していたが、柳田の勧告で一九三六年大阪・兵庫の各民俗学会と協同したと回想している（柴田実「京都府」『日本民俗大系十一　地方別調査研究』一九五八年）。
25 桜谷忍「編集後記」『兵庫県民俗資料十七』兵庫県民俗研究会、一九三五年五月。
26 次号の『民間伝承』一－五に、橋浦泰雄による「編輯雑記」では、太田陸郎の注意によって訂正される旨が述べられている。
27 柴田実「京都府」前掲。
28 『近畿民俗』は休刊まで計八号が刊行されたが、柳田はその中で一－一から一－五及び二－一に、計六本も寄稿している。
29 宮本常一「太田陸郎氏を悼む」前掲。
30 「日本民俗学連続講習会」『民間伝承』二－一、二－五。

31 太田陸郎は一九三六年八月二四日柳田宛書簡（「橋浦文書」前掲所収）で、すでに橋浦に承諾の返事を出していると報告している。世話人の変化は『民間伝承』二－三（十一月）に公表されている。

32 小国喜弘の統計によると、民間伝承の会の会員の中、『郷土研究』第一期（一九一三～一九一七年）、『民族』、『郷土研究』第二期（一九三一～一九三四年）すべてに投稿していたのは、柳田以外、沢田四郎作、胡桃沢勘内、中山太郎、林魁一の四名に過ぎないという（小国『民俗学運動と学校教育』前掲、二九頁）。

33 宮本常一「太田陸郎氏を悼む」前掲。

34 「第五回談話会ニユース」『兵庫県郷土研究』一－六（岩田重則編『赤松啓介民俗学選集別巻』所収、明石書店、二〇〇四年、二七八頁）。

35 『兵庫県郷土研究』は一九三七年二月創刊され、計二四冊発行された（同前所収）。

36 「第二回実地演習報告」『兵庫県郷土研究』一－二、同前所収、一二二頁。

37 「第五回談話会ニユース」「会員の動静」『兵庫県郷土研究』一－六、同前所収、二七八－二七九頁。

38 「会員動静」『兵庫県郷土研究』二－三、同前所収、四四六頁。

39 「近畿民俗学会」『民間伝承』三－一〇、一九三八年六月。

40 以下、武漢作戦や軍の動きにかんしては、防衛省防衛研修所戦史室『戦史叢書　支那事変陸軍作戦〈二〉昭和十四年九月まで』朝雲新聞社、一九七六年を参照した。

41 第十一軍参謀部「第十一軍（呂集団）作命綴」。

42 「漢口攻略準備ノ為遡江作戦並ニ鄱陽湖作戦ニ関スル陸海軍協定覚書」第十一軍参謀部作成『第十一軍機密作戦日誌』。

43 七月十九日「呂集作命第九号　軍隊区分」。

44 九月二三日「呂集作命第七十六号　軍隊区分」。

45 「呂集作命第七十六号　呂集団命令」。

46 沢田四郎作「太田陸郎伝」前掲による。前述した太田陸郎より柳田国男宛一九三六年八月二四日付の書簡によれば、七月末、太田は「後備少尉」として召集され、工兵隊の演習に参加していた。

47 加茂幸男「太田資料」前掲、一六〇頁。

48 柳田国男「序」『支那習俗』三国書房、一九四三年。
49 なお、主な内容がほぼ各章に吸収されたからか、『民間伝承』に掲載された通信は収録されていない。
50 一九三八年九月九日九江、十月二五日武穴鎮、三一日武昌駅、十一月十一日漢口、二〇日徳安、二三日漢口、一九三九年一月漢口など（加茂幸男「太田資料」前掲）。
51 太田陸郎「行軍中にみた支那習俗（一）」。
52 太田陸郎「行軍中にみた支那習俗（一）」の「漁業寸記」、同（二）の「網」及び「中支奥地の鵜飼」など。
53 太田陸郎「行軍中にみた支那習俗（一）」。
54 太田陸郎「行軍中にみた支那習俗（二）」。
55 太田陸郎「陣中花信」『支那習俗』前掲。
56 太田陸郎「陣中随想」『支那習俗』前掲。
57 太田陸郎「支那の口碑」『支那習俗』前掲。
58 一九四〇年三月『民間伝承』五－六の通信で、太田陸郎は漢字の一致で喜ぶことについて記している。
59 たとえば、前述太田陸郎「揚子江流域の魚と漁法」は一九四一年十二月に作成されたものであるが、そこですでに沢村幸夫『支那草木虫魚記』（東亜研究会、一九四一年）を参考している。その他、Common Foodfish of Shanghai by Bernard E. Read, Pubulished by Shanghai, 1939. 木村重「世界の謎支那の川魚物語」『大陸新報』、陳嶸『中国樹木分類学』一九三七年なども参考書としてあげられている。
60 太田陸郎の研究は特に漁法や魚類、動植物、民具、花の習俗などについて詳細であり、その歴史的変遷や社会制度などについての記述がほとんど見られない。報告の中で多くの写真や図を盛り込ませている（本章表11を参照）のも、その一つの表れであるかもしれない。
61 太田陸郎「中支賞花習俗」『支那習俗』前掲。
62 太田陸郎「進軍中にみた支那習俗（一）」。
63 「太田陸郎氏の近信」『兵庫県郷土研究』三－二（一九三九年六月）、前掲、五五三頁。
64 太田陸郎「金陵棲霞山仏教美術と六朝遺物」『支那習俗』前掲。

65 太田陸郎「音信一束」『民間伝承』八－五、一九四二年九月。
66 太田陸郎「会員消息」『民間伝承』六－三、一九四〇年十二月。
67 太田陸郎「会員消息」『民間伝承』六－四、一九四一年一月。
68 橋文策はこけしの研究家で『民間伝承』五－一によれば一九三九年八月五日に満洲国通信社に入社した。
69 山田隆夫「日本民俗学展覧会記録」『旅と伝説』一三－一、一九四〇年一月。
70 橋浦泰雄「紹介と批評」『民間伝承』九－八、一九四三年十二月。
71 柳田国男「帰らざる同志」前掲、二二八頁。

第3章

1 守随一は戦中に亡くなったことに加えて著作や発表された文章も多くなく、彼についてまとまって取り上げたものは管見の限り、最上孝敬「守随一君」（『日本民俗学大系三』平凡社、一九五八年、三四五頁）と『柳田国男伝』での記述（前掲、八二二－八二四頁）以外見当たらない。

2 一九二三年作、吉田信俊作曲。

3 佐々木彦一郎は秋田県鹿角郡花輪の生まれで、東京帝国大学で地理学を専攻し、同大学地理学教室の助手、講師となる。柳田国男に師事して地理学と民俗学を結びつく分野を開拓した。小田島興三「噫！佐々木彦一郎兄」（一九三六年十一月三〇日付）『鹿友会誌』第三九冊、佐々木梅『佐々木彦一郎：遺稿と追憶』白猫社一九三八年。大間知篤三「佐々木彦一郎君略伝」『日本民俗学大系四』平凡社、一九五九年などを参照。

4 H・スミス著、松尾尊兊・森史子訳『新人会の研究―日本学生運動の潮流』東京大学出版会、一九七八年、四九－五〇頁。

5 酒井正文「『先駆』時代の活動」中村勝範編『帝大新人会研究』慶応義塾大学出版会、一九九七年、一一〇－一一一頁。少年中国学会について呉小龍『少年中国学会研究』上海三聯出版社、二〇〇六年を参照。

6 H・スミス『新人会の研究』前掲、一五九頁。

7 鶴見太郎「柳田民俗学と東大新人会―大間知篤三を中心に―」『史林』七七－四、一九九四年七月参照。
8 新人会ではこのような研究が盛んであったことに関してたとえばスミス『新人会の研究』前掲、一一五－一二二頁を参照。
9 橋浦泰雄「冥途の報告待っている」『大間知篤三著作集月報二』未来社、一九七五年九月、一頁。
10 H・スミス前掲を参照。
11 鶴見太郎「柳田民俗学と東大新人会」前掲を参照。
12 同前、九六－九七頁。
13 鶴見太郎『柳田国男とその弟子たち』前掲、九一頁。
14 守随一の父親の啓四郎は柳田国男と一高の同級生で、東京帝国大学を経て住友銀行に就職したが、守随はその関係で十代の頃から柳田のところに出入りしていた（『柳田国男伝』前掲、八二二頁）。
15 大間知篤三「倉田一郎君の思い出」『日本民俗学大系一』平凡社、二七八頁。
16 橋浦泰雄「インタビュー・柳田国男との出会い」前掲によれば、守随一が満洲に赴いた後、大藤時彦は鎌倉に移っており、大間知篤三は家が狭いから、雑誌の編集も会の事務所も久我山にある自分の家が利用されるようになったという。
17 これは単独で行った調査の記念すべき第一弾で、大間知篤三の愛着も大きく、のちに日本での調査をまとめた著作に『神津の花正月』というタイトルを付けた。
18 大間知篤三は一九三六～三八年の間、第五〇回、五五回、六五回、七五回と第九四回木曜会で発表した。なお守随一は第六〇回と第七七回で発表している（『民間伝承』各号による）。
19 最上孝敬「『神津の花正月』」『追悼特集』一〇八－一〇九頁。
20 大間知篤三「『隠居』について」（『大間知篤三著作集一』未来社、一九七五年所収、五一頁）。
21 その最初は『民間伝承』一－二の「紹介と批評」である。そこで大間知は全国山林会聯合会による『第一回山村実態調査報告書』（一九三五年三月）を「全国から十二山村を選定し、昭和八年以来の各村総合調査と世帯調査の一篇に分ち、夫々細部に亙つた広汎な調査書である」と紹介している。
22 たとえば、大間知篤三は『民間伝承』三－四（一九三七年十二月）で「独逸民俗学会の一斑」として国際民俗協会機関

誌「フォーク」第二号（一九三七年八月）フォン・ヘルベルト・ベルマンによる「独逸民俗学の諸組織」の概略を紹介している。守随一は三―九（一九三八年五月）に「独逸に於ける質問要項」としてマイヤーとヘルボークが整理した民俗地図作成のための質問要項十項目の中から死と埋葬に関連するものを紹介している。

23 関敬吾も会員で接待係の仕事を担当し、四月二日の午後に発表を予定されていたが、とりやめられた。なお、参加会員名簿の中に民俗学関係者が多く、会員外聴講者として郭沫若、銭稲孫、シュミット、最上孝敬、直江広治、萩原正徳などの名前が見られる。

24 たとえば、宮本常一も建国大学の助手として満洲へ行くことを真剣に考えていたが、渋沢敬三のサポートで国内に留まった（宮本「民俗学への道」初出一九七四年、『宮本常一著作集四二　父母の記／自伝抄』所収、未来社、二〇〇二年、二〇九頁）。

25 満鉄調査部については、小林英夫『満鉄「知の集団」の誕生と死』吉川弘文館、一九九六年、末広昭「アジア調査の系譜―満鉄調査部からアジア経済研究所へ」末広編『岩波講座「帝国」日本の学知六　地域研究としてのアジア』前掲などを参照。

26 最上孝敬「木曜会創設当時の大間知篤三」『大間知篤三著作集月報一』一九七五年一月、二頁。

27 二月二五日付、「熱河丸船室にて記す」とある。『大間知篤三著作集一』前掲所収、五〇頁。

28 現在、確認できた岡川栄蔵の著作は『邦人農家労働調査報告』大連：満鉄経済調査会、一九三四年、岡川・春原孝平『邦人移民農家経済調査報告』（経調資料第八八号満洲移民経済調査第二輯）満鉄経済調査会、一九三五年、「満洲農業移民と科学」『満洲特産月報』三―七、一九三八年、『満洲開拓農村の設定計画』（未開地拓植計画の研究　第一輯）竜文書局、一九四四年などがある。

29 一九三六年一月九日、満鉄経済調査会、衛生研究所、奉天の医大、満洲国文教部、関東州庁等からの共同調査員一行二三人が「科爾泌右翼後期（旗か―筆者注）腰四不奎」という蒙古部落の調査が行われ、岡川もその一人であった（桑江常夫「満洲と琉球の習俗（二）」『旅と伝説』一〇―三、一九三七年三月）。

30 のち東京支社業務課、調査室を経て一九四二年十二月から北満経済調査所所長兼ハルピン図書館長になる（中西利八編『満洲紳士録』満蒙資料協会蔵版一九三七年昭和十二年版、一二七〇―一二七一頁、一九四〇年第三版、五三九頁、一九

四三年第四版、四六〇頁を参照した）。

31 山根幸夫『建国大学の研究―日本帝国主義の一断面』汲古書院、二〇〇三年を参照。

32 建国大学刊『建国大学要覧　康徳八年度』一九四一年七月（日本常民研究所蔵民族学振興会蔵書）。

33 大森志郎「大間知君の満洲」『大間知篤三著作集月報一』前掲三頁。

34 このことは『民間伝承』四－八（一九三九年五月）にも報じられている。

35 大森志郎「大間知君の満洲」前掲、四頁。

36 牧田茂の回想による。鶴見太郎『柳田国男とその弟子たち』前掲、二二六頁を参照。

37 引用は柳田国男「続かちかち山」（一九三九年一月）『柳田国男全集』十三、五八六頁。

38 大間知篤三の区分は「ダウール族巫考」『大間知篤三著作集六』所収、一七五－一七六頁を参照。

39 石堂清倫は大間知篤三が満洲に来てまず自分の所に二晩泊まり、そのとき満洲族の研究をするためにシロコゴロフの著作を集めたいと頼まれ、満鉄調査部資料室と大連図書館から借り出して大間知に持たせたと回想している。石堂「大間知君の思い出」『大間知篤三著作集月報六』一九八二年二月、二頁。

40 シロコゴロフ「緒論」『満洲族の社会組織』大間知篤三訳、『大間知篤三著作集六』所収、二八二頁。

41 小熊勢記「満洲時代の大間知先生」『追悼特集』前掲、一二六頁。

42 初出『アジア問題講座九　社会・習俗篇』一九三九年九月、『大間知篤三著作集六』所収。

43 大間知篤三「ホロンバイルの民族と宗教」（一九四四年一月）『大間知篤三著作集六』所収、一三〇頁。

44 『建国大学要覧』前掲、二八頁。

45 上野和男「大間知篤三―その研究と方法」前掲、二二六頁。

46 竹田聴洲「解説」『大間知篤三著作集六』前掲、五四九－五五二頁。

47 大間知篤三「民族学と民俗学」『満洲民族学会会報』一－一（一九四三年七月）一－三頁。なお、『満洲民族学会会報』一－一は二つあり、創刊号は五月、この七月号は事実上の第二号であった。

48 福田アジオ「常民概念と民俗学」（『日本民俗学方法序説』前掲所収）を参照。

49 『民間伝承』五－二（一九三九年十一月）に「十日の予定で京城、平壌へ参りました。京城帝大の宗教学社会学の研究

室を見せて貰ふことが一番大きな目的であります。秋葉、赤松両先生にもお会ひして種々嬉しく思ひました」と京城からの大間知篤三の通信が載せられている。

50 全京秀「植民地の帝国大学における人類学的研究」岸本美緒編『岩波講座「帝国」日本の学知　第三巻　東洋学の磁場』岩波書店、二〇〇六年、一一〇－一一三頁、竹田旦「解説」前掲、五四四頁。

51 一九四一年七月に軍医として満洲に赴いた沢田四郎作は「私も渡満してからは、シヤーマンやオロツチヨンに興味をも」つようになったと述べている（沢田「満洲の頃の思い出」『追悼特集』前掲、一二一頁）。

52 大間知篤三「訳者序文」『満洲族の社会組織』（『大間知篤三著作集六』所収、二六五頁）。

53 「木曜会」『民間伝承』七－三（一九四一年十二月）。

54 一九四三年まで五本しかなく、新聞での短文や連載が主であった。内訳は『満洲日々新聞』三本、『東京日日新聞』、『観光東亜』、『ひだびと』各一本であった（「著作目録」『大間知篤三著作集六』所収による）。

55 大間知篤三「黒竜江紀行」『東京日々新聞』一九四一年六月（『大間知篤三著作集六』所収、六〇頁）。

56 同前、六〇頁。

57 同前、六一頁。

58 大間知篤三「大藍旗屯の信仰」一九四四年六月、未発表（『大間知篤三著作集六』所収）。

59 同前、六三頁。

60 関景春は大間知篤三に神棚の祖宗匣を下ろして神位と神名を教え、貴重な宗族の祭祀規則や族譜を見せて写させ、さらに白日祭祖、夜間祭神、院心祭天三部構成の大事な宗族祭祀に参加させ、それが終わった後、満洲語による祭文も贈ったという。同前参照。

61 畢光遠は、かつて名著『松花江下流のホチョ族』を著した凌純声が一九三〇年に調査していた際の案内役であり、凌が南京に戻ってからも二〇余万字の報告を送っていた。大間知篤三は約十日、毎日彼から話を聞いていたという。大間知篤三「魚皮を纏いし人々」『芸文』一九四三年七月（『大間知篤三著作集六』所収）。

62 同前、七〇頁。

63 大間知篤三「民族篇　二満洲族」『満洲風土記』満洲日報奉天支社、一九四四年（山下晋司・中生勝美他編「アジア・

太平洋地域民族誌選集」三三所収、クレス出版二〇〇二年）一五頁。

64 大間知篤三「魚皮を纏いし人々」前掲、七七頁。

65 大間知篤三「ホロンバイルの民族と宗教」（『大間知篤三著作集六』所収、一一七頁）。

66 大間知篤三「満洲の民族呼称」『建国大学研究院月報』一九四三年十月（『大間知篤三著作集六』所収、一五九頁）。

67 大間知篤三「ダウール族巫考」（『大間知篤三著作集六』所収、一七五－一七六頁）。

68 同前、二一七頁。

69 大間知篤三「民族篇　六蒙古族」『満洲風土記』前掲、三一頁。

70 同前、三〇頁。

71 大間知篤三「民族研究所の必要」（『大間知篤三著作集六』所収、一四九頁）。

72 大間知篤三「民族篇　六蒙古族」前掲、五一頁。

73 小寺融吉「満洲と朝鮮」『旅と伝説』一九三〇年一月、一一〇－一一一頁。

74 『建国大学要覧』一九四一年前掲、坂東勇太郎「建国大学教授大間知篤三先生」『追悼特集』一二七－一二九頁。坂東は樺太生まれ、大泊中学校卒業、当時は建国大学の二期生であった。なお、坂東は大間知が「専門の民俗学を教えられた」と記しているが、正式の科目名は民族学であった。

75 大間知篤三「屯長訪問記」『満洲日日新聞』一九四一年五月（『大間知篤三著作集六』所収、一三三頁）。

76 大間知篤三「新京南郊採訪記」初出『観光東亜』一九四一年七月（『大間知篤三著作集六』所収、五三頁）。

77 同前、四三頁。

78 大間知篤三「土地神覚書―屯の宗教的性格の分析のために」初出『建国大学研究院月報』一九四三年五月（『大間知篤三著作集六』所収、二六頁、「漢族巫素描」『書光』一九四三年七月（同、三三頁）。劉沛泉はホチョ族調査の時も通訳であった（「魚皮を纏いし人々」前掲、七一頁）。劉は吉林生まれ、ハルピン両級中学卒業、政治学科専修であった。泉水厳は岡山生まれ、旅順中学校卒業、文教学科専修。（『建国大学要覧』一九四一年前掲、六〇、六二頁）。

79 大間知篤三「土地神覚書」前掲、二一－二四頁より整理。

80 同前、二二頁。

81 初出『日本家族制度の研究』、「家についての覚書」と改題して『大間知篤三著作集六』に所収、四四－四六頁。
82 大間知篤三「神社奉祀の問題」初出『満洲日日新聞』一九四四年二月（『大間知篤三著作集六』所収、一三七頁）。
83 大間知篤三「南屯迎春譜」未発表（『大間知篤三著作集六』所収、九二－九三頁）。
84 大間知篤三「民族学と民俗学」前掲、二頁。
85 村岡重夫「民族学と農村実態調査」『満洲民族学会会報』創刊号、十二頁。
86 山根順太郎（一九〇三年～？）は一九二九年大阪外国語学校蒙古語学部卒業、興安東省布特哈旗代理参事官、蒙古政府沽源県顧問、満州国蒙政部調査科などを経て一九三九年六月から現職についた（中西利八編『満洲紳士録』前掲、一九四〇年第三版、三六八頁、一九四三年第四版、一三四四頁を参照した）。
87 『民間伝承』六－六（一九四一年三月）大間知篤三と大山彦一による通信を参照。
88 板垣守正の「満洲民族学会の設立」『満洲民族学会会報』創刊号、及び大山彦一「社会学と民族学」同二－二のによる。
89 中生勝美「植民地の民族学―満洲民族学会の活動」前掲、一三八頁。
90 「会員名簿」『満洲民族学会会報』一－三、一九四三年十一月。
91 岡正雄「現代民族学の諸問題」『民族学研究』新一－一、一九四三年一月。
92 創刊号に載せられている会長神尾弐春による「当来の民族学―会報発刊の辞に代えて」で『民族学研究』に載せたこの岡正雄の講演にふれ、共鳴を示している。
93 たとえば、「土地神覚書―屯の宗教的性格の分析のために」『建国大学研究院月報』一九四三年五月、「民族学と民俗学」『満洲民族学会会報』一九四三年七月、「漢族巫素描」『書光』一九四三年七月、「満洲の民族呼称」『建国大学研究院月報』一九四三年十月、「ホロンバイルの民族と宗教」一九四四年一月講演、「ダウール族巫考」『建国大学研究院月報』四一、一九四四年七月など（『大間知篤三著作集六』所収）。
94 大間知篤三「文献紹介」『満洲民族学会会報』一－一（一九四三年五月）、十四頁。

第4章

1　直江広治「あとがき―民俗学と私」（一九八七年六月）『民間信仰の比較研究―比較民俗学への道』吉川弘文館、一九八七年所収、三八四頁。

2　一九三五年の中島哲夫、一九三八年の久長興仁に次いで金関丈夫は台湾における三番目の入会者であった。

3　有馬真喜子「直江広治氏―筑波大学教授（ひと）」『季刊人類学』一〇―三、京都大学人類学研究会、一九七九年、一三八―一四七頁。

4　北見俊夫「直江広治先生と民俗学」筑波大学歴史・人類学系『歴史人類一〇　直江広治先生退官記念集』一九八二年三月、三―二一頁。

5　直江広治『民間信仰の比較研究』前掲所収、三七九―三九八頁。

6　直江広治「柳田先生の思い出―民俗学研究所を中心として」播磨学研究所編『再考　柳田国男と民俗学』神戸新聞総合出版センター、一九九四年十二月所収、二〇三―二二五頁。

7　鶴見太郎「柳田民俗学の東アジア的展開」前掲、一二二―一二六頁。

8　直江広治「あとがき―民俗学と私」前掲、三八〇頁。

9　直江広治「まえがき」（一九六七年二月）『中国の民俗学』岩崎美術社、一九六七年、一頁。

10　最近、田中正明編『柳田国男の絵葉書―家族にあてた二七〇通』（晶文社、二〇〇五年）が出版され、【国外編】「大正六年」にこの「台湾支那旅行」の旅先よりの書簡、絵葉書計二七通が収録され（一五一―一八一頁）、「柳田国男年譜」（前掲、二三頁）の記述と照合し、具体的な日程や活動が確認できた。三月下旬の台北、基隆の滞在を経て柳田国男は四月十一日に厦門より上陸し、十四日に香港に着き、翌日から広東を旅行し、二五日に香港に戻り、二九日香取丸にて上海に出発し、五月二日に到着。五月七日に南京、九～十三日に漢口、大冶、十四～二〇日に北京を旅行した後天津、済南、青島、大連、奉天、京城を経て六月二日に帰宅した。

11　柳田国男「六十余日の旅を了へて」『東京日日新聞』一九一七年六月四日付（『柳田国男全集二五』所収、二三五頁）。

12　直江広治「まえがき」前掲、二頁。

13 直江広治「あとがき―民俗学と私」前掲、三八二頁。
14 『民間伝承』四－七に詳しい。講師陣は柳田国男、折口信夫、金田一金助をはじめ、大藤時彦、関敬吾、橋浦泰雄など木曜会の先輩がいた。
15 直江広治「あとがき―民俗学と私」前掲、三八二－三八四頁。
16 江馬三枝子は一九三六年九月に民間伝承の会に入会し、当時『ひだびと』を主宰していた。
17 この二冊は創元中国叢書の第三、四冊目であった。最初の二冊はは胡適の『四十自述』と豊子愷の『縁々堂随筆』であり、ともに吉川幸次郎訳。
18 直江広治「あとがき―民俗学と私」前掲、二八二－二八三頁。
19 柳田国男「学問と民族結合」『柳田国男全集三〇』、三二八頁。
20 直江広治「柳田先生の思い出―民俗学研究所を中心として」前掲、二〇九頁。
21 一九四一年七月十二日付橋浦宛葉書による（「直江広治書簡」所収）。「直江広治書簡」（以下、「直江書簡」）とは橋浦泰雄が残した個人資料の中に入っていた直江広治より橋浦や柳田宛の葉書、書簡、電報など計十二通（一九四一年十一月～一九四五年一月）を指す。尚、この資料の利用は鶴見太郎、直江千鶴子両氏のご好意による。
22 直江広治「会員消息」『民間伝承』六－一一、一九四一年八月。
23 「直江書簡」によると、一九四一年十一月『西讃岐昔話集』（武田明編、香川県立丸亀高等女学校郷土研究室、一九四一年六月）、一九四三年六月『民間伝承と家族法』（橋浦泰雄、日本評論社、一九四二年十二月）が送られている。
24 「直江書簡」によると、直江は一九四二年四月に『石神問答』（柳田国男、創元社日本文化名著選一、一九四二年）、菅江真澄（創元社創元選書、一九四二年三月）、一九四二年十一月に『日本民俗学入門』（柳田国男・関敬吾、改造社、一九四二年八月）、『増補風位考資料』（柳田国男編、明世堂、一九四二年七月）、『国語と民俗学』（倉田一郎、青磁社、一九四二年七月）、一九四三年十月に『民俗採訪』（橋浦泰雄、大阪六人社民俗選書、一九四三年）をそれぞれ購入している。
25 直江広治「北京東郊の民俗」（初出『ひだびと』一一－一〇、一九四三年十月。『中国の民俗学』前掲所収、一九七頁）。
26 沢田瑞穂「縁起」（一九六五年七月）沢田編『燕趙夜話―採訪華北伝説集―』采華書林、一九六五年、一－九頁。
27 直江広治「宛平県河北村採訪記」（『中国の民俗学』前掲所収、二一三頁）。

28　華北農村慣行調査の本調査は一九四〇年十一月から一九四三年まで行われ、最終的な調査地は華北四村落、山東二村落、すなわち河北省順義県、欒城県、昌黎県、良郷県（附静海県）、山東省歴城県、恩県であった。

29　『民間伝承』八－一一（一九四三年三月）新入会員の「中華」項に再び「山本斌」の名前が見られ、重複だと思われる。生田中庸は一九四三年時点で東方民俗研究会の会員であり、民風会のメンバーであったと思われる。所属は一九四三年十月当時開灤炭鉱唐山出張所であり、一九四四年十二月、華北総合調査研究所に変わった（「東方民俗研究会一覧」一九四三年十月、「民間伝承の会会員名簿」一九四四年十二月、ともに「橋浦文書」による）。

30　「直江書簡」所収。

31　一九四二年七月十二日直江広治より橋浦泰雄宛書簡では「歳時記わざわざ『民族学研究』に御廻送下され感謝致します。及川氏より御紹介あり、御返事を出して置きました」と記されている。なお、橋浦は日本民族学会の会員であり、『民族学研究』六－三（一九四〇年十一月）に「南洋諸島の産育習俗」を寄稿している。

32　「食　・九〇　見　・九〇　山　一・七〇　居　一・〇〇　送（書留）・八〇　会　二・〇〇　七・三〇　代金請求中（山本氏へ）」という書込みによって判断した（図14参照）。なお「山」は『山村生活の研究』も考えられるが、『民間伝承』八－一（一九四二年五月一日印刷）の「本会発行及び取扱図書目録」の定価によって『分類山村語彙』であるべきだと判断した。

33　『炭焼日記』一九四四年四月一日に「北京の山本斌君来、直江君紹介」（『柳田国男全集二〇』所収、四八七頁）とある。

34　直江広治『中国の民間伝承』前掲、二四五頁。

35　『折口信夫全集三六』所収、中央公論社、一〇七頁。

36　二五二番～二五九番、同前所収、一九八－二〇〇頁。

37　阿部正路・芳賀日出男「折口信夫の中国行」芸能学会編集委員会編『年刊芸能』三号、一九九七年三月。

38　一九四一年十二月皇典講習所華北総署の月刊機関誌『惟神道』が創刊され、一九四二年二～四月号に折口信夫の「古代人の信仰」を載せている。『民間伝承』八－三（一九四二年七月）に『惟神道』創刊号から四月号が受贈したとある。民俗学関連の文章は外に石橋丑雄「祖師信仰に就て」（創刊号）、「支那の沐浴儀礼と禊祓」（一月）、武田熙「中国回教序説」（三月）、村田治郎「関帝廟祭祀の一考察」（四月）がある。定価月五〇銭、発行は北京市外四区広安門大街とある。なお

一九四三年六月の『民間伝承』九－二にも『惟神道』寄贈の情報があった。

39 「五日がかりで北京に到着、相当疲れました（中略）いろいろ見学で、なかなか寝る間も乏しいほどです」とある。

40 沢田瑞穂『中国の民間信仰』工作舎、一九八二年、五五一－五五二頁。

41 同前、五五二頁。

42 中法漢学研究所は、一九四一年十月、駐中国フランス大使コスモー（H.Cosme）の主宰で、旧中法大学の敷地に設置されたものである。一九二〇年に創設された中法大学は北京占領後、軍側の弾圧によって一九三八年に閉校となり、北京における文化活動機関として設置されたのがこの中法漢学研究所である。研究所は民俗組、語言歴史組、通検組、図書館からなっており、主任研究員は楊堃で、民俗組に傅芸子、傅惜華などがいた。研究所機関誌は中国語とフランス語による『漢学』で、一九四四年に第一輯を発行した。民俗関係では楊の研究や、研究所常務理事デュボスク（一九〇三年～、M.Dubosc）のコレクションを中心とした「神馬」、「年画」の蒐集整理、そして一九四二年七月に行われた「民間新年神像図画展覧会」などがあげられる（『漢学』第一輯、一九四四年などを参照）。

43 沢田瑞穂「縁起」前掲。

44 早川孝太郎は「会員消息」で「十月八日に東京を立つて朝鮮と満洲に参りました。朝鮮では平安北道の満浦鎮といふ山村に参り、そこから鴨緑江に沿うて、約九十里を下り、昨日新義州に出で、そのまま奉天市に参りました。これよりハルピンを廻り、牡丹江から北鮮に出で、十一月はじめに京城にかへり、十一月十七八日頃東京にかへります」と報告している（『民間伝承』六－三、一九四〇年十二月）。早川が農村更生協会の嘱託となったのは一九三六年五月であったが、すでに満洲移住協会が一九三五年に設立され、満洲移民が次第に「農山漁村更生運動」の焦点の一つとなっていた。一九四〇年のこの旅もそれを背景にしているのだろう。

45 日本地学史編纂委員会・東京地学協会編「日本地学の展開（大正十三年～昭和二〇年）〈その二〉―「日本地学史」稿抄―」『地学雑誌』一一〇－三、二〇〇一年、三六二－三九二頁。

46 直江広治「あとがき―民俗学と私」前掲、三八六頁。

47 宮本敏行『山西学術紀行』新紀元社、一九四二年、一三頁。

48 宮本敏行「第一次山西学術調査研究団の編制及行程」朝日新聞社東京本社『山西学術探検記』一九四三年所収。

49 植物分類地理学会編『植物分類・地理』四〇－五・六、一三三－一四六頁。
50 華北交通株式会社は日本が占領した華北地域の鉄道、バス業務を管理するために一九三八年に創立された国策会社であった（華交互助会編『華北交通株式会社社史』一九八四年）。『北支』は一九三九年六月に創刊され、国内では現在五一号（一九四三年八月）まで確認できた。
51 直江広治「あとがき―民俗学と私」前掲、三八八頁。
52 たとえば、鶴見太郎『柳田国男とその弟子たち』前掲、一八一－一八二頁にもそれに関する指摘がある。
53 のち、このひと夏の調査結果である報告書は印刷中空襲で焼失してしまったという（『石田英一郎全集四』筑摩書房、一九七〇年、四九頁）。
54 同前、五一頁。
55 一九四二年十一月十一日柳田国男宛書簡（「直江書簡」所収）。
56 以下、輔仁大学について多くは『北平私立輔仁大学檔案（一九二五－一九五二）』（以下「輔仁檔案」と記す）による。一九二五年の大学創立の準備作業から、一九五二年に北京師範大学に合併されるまでの学校の公式記録が、解放前（一九四八年まで）と解放後（一九四九年以降）に分けて保管されている。とくに解放前の資料は、総類二三巻、人事類六九巻、教学教務類五四四巻、政治類六五巻、総務財務類二二巻、付属学校関係二八巻、年刊同学録など三七巻と資料三三巻という膨大な数に上っている。なお、解放後に関しては総類二七巻、人事類二五巻、教学教務類六三巻、総務財務類二四巻、付属学校関係七巻などの資料がある。戦前中国における教会大学の概況および輔仁大学の沿革については拙文「教会大学と日中戦争―『北平輔仁大学檔案』から見た戦時下の学生収容」（『年報　人類文化研究のための非文字資料の体系化三』神奈川大学21世紀ＣＯＥプログラム、二〇〇六年三月）を参照。
57 神言会は一八七五年にドイツ人によってオランダで設立されたカトリック団体で、文学名著の印刷、教会での高等教育などに力を入れ、一九三七年には九〇〇〇人規模の信者がいた。
58 拙文「教会大学と日中戦争―『北平輔仁大学檔案』から見た戦時下の学生収容」前掲を参照。
59 外務省資料Ｈ－六－二－〇－二六－〇二二「寄贈品関係雑件第二十二巻　一八、輔仁大学ニ図書寄贈」による。
60 「輔仁檔案」巻五八。

61 北京大使館より外務大臣宛機密第六二三号電、外務省資料H－六－二－〇－二六－〇二二、前掲所収。
62 「輔仁檔案」巻六二。
63 一九三九年五月、細井次郎は輔仁大学図書館に日本関係図書の寄贈と、日本語が優秀な学生への賞品としての辞書の提供を大使館に頼んだが、諸事情で成り得なかった（外務省資料H－六－二－〇－二六－〇二二、前掲）。
64 終戦後辞表を出した細井次郎に対して、九月五日、校長陳垣がわざわざ書簡を出した。そこで七年間の校務に対する貢献に感謝し、辞職に関しては当面一年間休暇を与える形にし、期間満了後戻ってほしいと述べている（「輔仁檔案」巻六九）。
65 「輔仁檔案」巻四二。校務長の事務補助として秘書が置かれたが、首席秘書という職はなかった。太平洋戦争勃発後、初期の書類ではまだ校務長首席秘書のサイン欄が印刷されておらず、手書きで追加されている。この職が新設された以降、すべて重要書類に必ず校務長首席秘書のサインが必要であった。
66 「輔仁檔案」巻三〇二。
67 八巻澄江は当時二八歳、日本東京女子大学卒業（「輔仁檔案」巻五九）。
68 嶋美恵子は当時二六歳、東京私立聖心女子学院高等専門学校国文科卒業、日本文部省国語科師範学校及び中等学校教員（「輔仁檔案」巻六〇）。
69 渡辺善次は上智大学哲学科卒業（「輔仁檔案」巻六一）。
70 一九四二年十一月十一日柳田国男宛書簡では直江広治は「細井先生は（中略）東京では先生の所に是非お伺ひすると申して居りました」と伝えている（「直江書簡」所収）。
71 一九四四年七月三日橋浦泰雄宛書簡（「直江書簡所」所収）。
72 『柳田国男全集二〇』所収、五一五頁。
73 「輔仁檔案」巻六九に収録されている。
74 『輔仁檔案』巻一五九。
75 顧頡剛（歴史研究所研究員）、白寿彝（北京師範大学歴史系教授）、容肇祖（哲学研究所研究員）、楊堃（中央民族研究所研究員）、楊成志（中央民族学院教授）、羅致平（民族研究所研究員）、鍾敬文（北京師範大学中文系教授）の七名であ

る。

76 中国民俗学籌委会編『会刊』、一九八二年十二月、七六頁。

77 中国民俗学会編『会刊』第二期、一九八四年三月、六八、八〇頁。

78 そこで日本民俗学の発展を準備期（一八八六～一九〇六年）、『郷土研究』時期・発足期（一九〇七～一九二四年）、『民族』時期・確立期（一九二五～一九三三年）、木曜会時期・発展期（一九三四～一九四五年）、民俗学研究所時期・再建期（一九四六～一九五七年）、柳田国男死去以降（一九六二年～）との六時期に分け、それぞれの主な活動と業績を概観している。中国民俗学会秘書組編『民俗工作通訊』第一期、一九八四年六月、一－三頁、及び張紫晨編『民俗学講演集』書目文献出版社、一九八五年、一二七－一四七頁を参照。

79 後藤興善著・王汝瀾訳『民俗学入門』中国民間文芸出版社、一九八四年六月。

80 関敬吾編、王汝瀾・龔益善共訳『民俗学』中国民間文芸出版社、一九八六年六月。

81 「輔仁檔案」巻四四。

82 趙衛邦は輔仁大学大学院史学科卒、一九四二年から研究員となる。

83 一九四二年から許道齢（北京大学史学部卒）に変わる。

84 一九五二年以降、中国語の誌名がなくなり、出版元もS.V.D Research Institute（東京、一九五三～五六年）、神言会（東京、一九五七～六二年）と変わり、一九六三年以降さらに『Asian Folklore Studies』（東京：Society for Asian Folklore、一九六三～七二年→名古屋：Asian Folklore Institute、一九七三年～）と改名した。エーデルは一九八〇年四月二七日に日本で亡くなり、その蔵書は戦後、彼が所員を務めていた南山大学人類学研究所に寄贈された。なお、『Asian Folklore Studies』は同研究所に受け継がれ、いまでも年二号出版されている。拙文「『民俗学誌（Folklore Studies）』について」『非文字資料研究十一』神奈川大学21世紀ＣＯＥプログラム、二〇〇六年三月を参照。

第5章

1 柳田国男研究会編『柳田国男研究資料集成十八』所収、日本図書センター、一九八九年、一一七－一三八頁。

2　前記、藤井隆至「柳田国男のアジア認識」が『柳田国男経世済民の学―経済・倫理・教育』（前掲）に収録される際、表題が「『比較民俗学』の政治思想―太平洋戦争下のアジア意識」と改められている。

3　鈴木満男「東アジア世界からみた柳田学」『柳田・折口以降：東アジアにおける《民俗》のトポス』世界書院、一九九一年。

4　たとえば、直江広治『民間信仰の比較研究』前掲、桜井徳太郎『桜井徳太郎著作集七　東アジアの民俗宗教』吉川弘文館、一九八七年、下野敏見『東シナ海文化圏の民俗：地域研究から比較民俗学へ』未来社、一九八九年、竹田旦『祖先祭祀と死霊結婚』人文書院、一九九〇年など。

5　鳥越皓之「柳田国男の比較民俗学の論理構造」竹田旦編『民俗学の進展と課題』所収、国書刊行会、一九九〇年。

6　川村湊『「大東亜民俗学」の虚実』前掲、十一頁。

7　古家信平「まぼろしの国際共同研究」筑波大学民俗学研究室編『心意と信仰の民俗』所収、吉川弘文館、二〇〇一年。

8　このとき、『民間伝承』の編集は遅れており、八月号は実際発行されたのは九月以降であった。

9　たとえば『民間伝承』七-二（一九四一年十一月）の「学界消息」では一九四一年末の各地民俗講座の様子を以下のように伝えている。「福井市　大政翼賛会福井県支部主催講座　十一月三四五日　柳田、柴田実、平山敏治郎、高谷重夫　県下全村から一名以上召募予定　新潟市大政翼賛会新潟県支部、高志社共同主催講座　十一月十五六日　関敬吾外数氏　福岡県　北九州文化聯盟、福岡郷土会共同主催講座　十一月十七八日　柳田　二十五日長崎医大　二十七日熊本医大講演」。

10　同じ内容の「会告」は次号の『民間伝承』九-五では古稀記念会の趣旨、発起人、実行委員と一緒に再び掲載された。一九四三年の最終号に当たる九-八（十二月）で三回目掲載されたとき、記念事業の全体像を意識してのことか、初めて「内地以外に於ける民俗学大会の開催」という項目が追加された。

11　橋浦泰雄「古稀覚書」、「橋浦文書」所収。

12　このとき折口信夫、橋浦泰雄以外、金田一京助、伊波普猷、石黒忠篤、新村出、渋沢敬三、石田幹之助、安藤正次、東條操、西田直二郎の名前があがった。

13　今野円輔「柳田国男と研究会―木曜会を中心に」『女子聖学院短期大学紀要九』一九七七年、二八頁。

14 小田倉一は医学博士、新人会成員で、大間知篤三と一九二七年同期の卒業生である。

15 盧溝橋事変後、北京の多くの高等教育機関が内陸奥地に移り、その空白を埋めるべく、一九三八年、旧北平、北京、清華、交通などの大学を統合する形で、「国立北京大学」が作られたが、那須皓はその農学院の創始者として活躍していた。周作人が一九三九年八月同大学に開設された文学院の院長であった。周は柳田国男の学問に親近感を持つことはよく知られている。

16 「会員名簿」『満洲民族学会会報』一－三（一九四三年十一月）十二－十四頁。

17 中生勝美「植民地の民族学―満洲民族学会の活動」前掲、一三八頁。

18 「小規」『民間伝承』八－一一、一九四三年三月。

19 たとえば、大間知は「私は台湾にこの月刊誌のあることを喜び且つ羨み、創刊号以来愛読している」と賞賛し、「北支」に同類の雑誌がないことを嘆いている（『満洲民族学会会報』創刊号の文献紹介）。

20 一九四三年五月六日金関丈夫より柳田国男宛書簡、「橋浦文書」所収。

21 柳田国男「学問と民族結合」『柳田国男全集三〇』三三〇頁。

22 柳田国男、浅野晃、橋浦泰雄「民間伝承について」『柳田国男対談集』所収、筑摩書房、一九六四年、一一五－一三三頁。

23 中生勝美『植民地人類学の展望』前掲、二一一－二五八頁。

24 橋浦泰雄「古稀覚書」前掲による。

25 十月二日直江広治より橋浦泰雄宛書簡、「直江書簡」所収。

26 鶴見太郎「戦後に於ける対峙―石田英一郎からの問いかけ」『柳田国男とその弟子たち』前掲、一八六頁。

27 大間知篤三「民族学と民俗学」前掲、二頁。

28 鶴見太郎「柳田国男民俗学の東アジア的展開」前掲、一一六頁。

29 「昭和十八年度　東方民俗研究会一覧」「橋浦文書」所収、一頁。

30 張菊香・張鉄栄編『周作人年譜』（天津人民出版社、二〇〇〇年）一九四三年十月三日条に「午後、東華会館に行き、東亜（ママ）民俗研究会成立大会に参加し、挨拶をした」とある（六六六頁）。これは同年譜の中で東方民俗研究会に関する唯一

の記録であった。

31 「対支文化事業」に関しては、阿部洋『「対支文化事業」の研究―戦前期日中教育文化交流の展開と挫折―』汲古書院、二〇〇四年を参照。

32 なお、同誌の最終号（一二－五、一九四四年五月）に、北京の日本研究社による『日本研究』一九四四年二月号に載せられた周作人の「草囤與茅屋」（二月八日付）を「ツブラと茅葺家」（大野政雄訳）として巻頭を飾っている。周はこの文章で江馬三枝子『飛騨の女たち』の冒頭の一篇「ツブラの中」に因んで「東亜の連帯」を訴えている。

33 周作人と新民印書館の関係は一九四二年あたりに始まったと思われる。それ以降の著作、たとえば『薬味集』『薬堂散文』『風雨後談』などはほとんど北京新民印書館から発行されている。

34 新民印書館、一九四四年九月。のち一九八四年、張紫晨翻訳・陳秋帆校正の訳文は書目文献出版社より出版された。

35 沢田瑞穂「縁起」前掲参照。なお、一九四七年に東京印書館が設立され、新民印書館の日本人引揚者を受入れ、平凡社の出版物印刷を中心とした活動を展開していた（東京印書館ホームページによる）。一方中国で接収された新民印書館は正中書局北平印刷廠に改名した（「近代篇・第十六章第三節」『中華印刷通史』財団法人印刷伝播興才文教基金会、一九九八年）。

36 坂本龍起の経歴は外務省記録、公文雑纂などによる。

37 和田憲夫は北支那開発会社調査局に勤め、東方民俗研究会の会員である。華北総合調査研究所は一九四二年六月に日本政府によって創設された「華北建設の基礎となる自然、文化の総合調査研究の中枢機関」（防衛庁防衛研修所戦史室『北支の治安戦』朝雲新聞社、一九六八年）であり、その入会はおそらく一九四三年六月からその副理事長を務めている周作人の影響があると思われる。鳥居龍蔵は一九四一年末太平洋戦争が勃発し、燕京大学が閉校を余儀なくされた後も北京に留まり、調査と研究に没頭していた。

38 平山は平山敏治郎のことである。しかし平山敏治郎は自分から同行を辞退した記憶はなく、後日橋浦泰雄から旅行許可の書類を記念に送ってもらったと回想している（平山「折口信夫先生」『民俗学の窓』学生社、一九八一年、一〇〇頁）。

39 同前、九九－一〇〇頁。

40 藤井隆至「柳田国男のアジア認識」前掲、一一八頁。

41 鈴木満男「東アジア世界からみた柳田学」前掲、一五一頁。
42 柳田国男・浅野晃・橋浦泰雄「民間伝承について」前掲、一一七－一一八頁。
43 同前、一二七頁。
44 『民俗台湾』五－二、一九四五年二月、一九頁。
45 鳥越皓之「柳田国男の比較民俗学の論理構造」前掲、五九六－五九七頁。
46 同前、六〇一頁。
47 高桑守史「倉田一郎―その研究と方法」前掲、二八四頁。
48 倉田一郎「新しき国風の学」『民間伝承』八－四、一九四二年八月。
49 柳田国男「出版界新編成への期待」『日本読書新聞』第二三七号、一九四三年二月（『柳田国男全集三一』所収、二八頁）。
50 三巻まであった「非売品」との表示が四巻以降は消えたが、定価の表示はなかった。
51 鶴見太郎『柳田国男とその弟子たち』前掲、五六－五七頁。
52 一九三六、三八、三九、四〇年の新入会員は各一名ずつしかなかったが、一九四一年二月の『民間伝承』六－五では二二名が新らたに会員となった。それに対して、次号（六－六）の学会消息では「民間伝承の会高千穂支部」として、朝日新聞社客員関口泰が旅行する際の勧めにより、宮崎県高千穂町外四村の有志が地方支部を設立したと説明している。その入会申請書は成城大学民俗学研究所に所蔵している（小国喜弘『民俗学運動と学校教育』前掲、一一二－一一三頁を参照）。『民間伝承』六－八で宮崎からはさらに五名が入会した。
53 実は大阪の世話人沢田四郎作も当時満洲に軍医として赴任中であった（奥村隆彦・原泰根編『沢田四郎作博士記念文集』沢田四郎作先生を偲ぶ会、一九七二年）。
54 この日、出席者十九名は柳田国男を中心に記念撮影をした（『民間伝承』八－一〇、一九四三年二月）。
55 「民間伝承の会会員名簿」（「橋浦文書」所収）前掲。なお、会員は総計二一三八名、うち中華民国十五名という小国喜弘の統計（『民俗学運動と学校教育』前掲、一一一頁）は不正確である。

終章

1　柳田国男「民間伝承の会消息」『祭日考』所収（『柳田国男全集十六』一〇三頁）。
2　『民間伝承』一一－三、一九四六年十月。
3　「大間知篤三著作目録」（『大間知篤三著作集六』所収）では「ハイラル・ダウール族の氏族巫」『季刊民族学研究』一四－一、日本文化人類学会、一九四九年という一本しかなかった。
4　直江広治「八月十五夜考」『民間伝承』一四－八、一九五〇年八月。
5　福田アジオ「近代日本の植民地と民俗学」『日本研究・京都会議一九九四Ⅱ』国際日本文化センター・国際交流基金、一九九四年。
6　岡正雄「東亜民族学の一つの在り方」『民族研究彙報』三－一・二合併号、一九四五年八月、一－四頁。